

**建築の聖性について**  
**—建築と人間と大地における本質的な意味に関する研究—**  
**On the holiness of architecture**  
**- Study on essential meaning in architecture, human and earth -**

○力武瑞穂<sup>1</sup>, 田所辰之助<sup>2</sup>○Rikitake Mizuho<sup>1</sup>, Tadokoro Shinnosuke<sup>2</sup>

Humans who cannot live only with instincts lose sight of the essence. Losing sight of essence, as the process aimed at war, makes a serious mistake. And that crisis is also true in architecture. Right now, should we rethink the real intention of architecture? In this research, we aim to reconsider the essential meaning and significance of architecture, which has been lost in many cases already, and to remember it permanently. I will take a look at the various elements surrounding the architecture and then investigate the religion, storage and irrigation facilities, sacred place, and the 'holiness' derived therefrom.

## 1. はじめに

本能のみで生き得ない人間は、本質を見失う。戦争において過程が目的化したように、本質を見失うことは重大な間違いをもたらす。そしてその危機は建築においても同様にある。

まさに今、建築の真意を問い直すべきではないか。

## 2. 研究目的と方法

現代におけるさまざまな物事の分化により、我々にとって、それが成された本質的な意味や価値に触れづらく、認識しづらいという状況が加速しているように思う。建築においても同様である。本研究では、建築という側面から、多くの場合すでに認識されることなくなってしまうその本質的な意味、意義を改めて問い直し、永続的に偲ぶことを目的とする。

建築をとりまくものには様々な要素が存在するが、建築の発生に関わった始源的な要素と、建築として成立し続けていることで生じる継続的な要素に分類する。

さらに、これらの中で始源的な要素に含まれる“宗教”や“貯蔵・灌漑設備”、“聖なる場”は、建築の特別な内部、特別なファサード、非特別的な建築の発生をもたらしたことで、それが自然環境などと多く結びつけられていること、そして、人が何かしらを信仰する行為は古代から現代において絶え間なく引き継がれていることから、今回の研究において、特に重要な要素であると考え、研究対象とする。

始源的な要素	継続的な要素
・ 死と生	・ 住む行為
・ 宗教	・ 時間
・ 聖なる場	・ 記憶
・ 貯蔵,灌漑設備	・ 社会性
・ 場所 空間	・ 象徴
・ 意味 境界	

Table 1. 建築を取り巻く要素とその分類

## 3. 宗教

・ 特別な内部、特別なファサードの発生

旧石器時代、人間は主に狩猟中心の生活の中で、自分たちの生を繋ぎ止めるため、大地の動植物の豊産、人間の安産を祈り、地母信仰が生まれた。この人類最初の宗教である地母信仰により、“特別な内部空間”がつけられた。(チャタル・ヒュククの遺跡など) 新石器時代、農耕が始まり、そのことから地母神を支配するとされる太陽神を祀る太陽信仰が生まれる。この太陽信仰により、“特別なファサード(高さ)”がもたらされたとされている。(ストーン・ヘンジなど)

## 4. 貯蔵,灌漑設備

・ 非特別的な建築の発生

人間の生活が農耕中心となり、生物的な個体としての時間スケール、日々の生活欲求などに基づいた生活時間をはるかに超えた時間をコントロールすることになり、はじめて定住が行われるようになる。人為的に開かれた自然、土地に、それを管理するための貯蔵設備や灌漑設備がつけられ、そこで人々を管理させるた

め、縛り付けるために定住住居が付属設備としてつくられた。非特別な建築の発生は、住みやすさなどの日々の欲求からではなく、むしろその前に、人々の欲求を固定する仕掛けがあったという。

## 5. 聖なる場



Figure1.ストーンヘンジ Figure2.プレセリ山地

人は、自然による様々な景観の中に神聖感を抱いてきてお、現代でも多くのものが継承され残っている。人が感じ取る“聖なるもの”とそれが現れる空間、そしてそこから立ち上がる形態について興味深いと同時に、建築に通ずる概念が存在すると考える。

イギリス、イングランド南部にある環状列石（ストーンサークル）の遺跡であるストーンヘンジは、4500年前につくられた画期的な建造物である。ストーンヘンジに使われた最古の石、ブルーストーンを産出した石切り場はプレセリ山地の東端、カーン・メニン周辺の露頭は粗粒玄武岩や頁岩であり、ストーンサークルやドルメン（支石墓）などの巨大な石のモニュメントがあることで古くから知られてきた。プレセリ山地の岩には同心円模様が刻まれており、「カップマーク」と名づけられていた。おそらく紀元前 4000 年ごろの人々は、天を突くように岩柱が立ち並び、独特の雰囲気にしたこの地を特別な“聖地”にとらえて、建造物を築いたといわれている。そして、別の場所でも同じ模様を建造物に刻みこみ、聖地を偲ぶものとしたのではないだろうかという。石切り場からストーンヘンジまでは最短ルートでも約 400 キロはあり、当時としては、かなりの大事業であっただろう。それでも、人々はプレセリ山地で感じた何か“特別なもの”を、イングランド南部まで運びたいと考えたのだといわれている。

## 6. 聖性

ここでは、建築をとりまくという点に限定せず、聖性の存在について研究を進めていく。まず、“聖性”、“聖なるもの”という言葉私たちは通常、無条件に倫理的な意味で、例えば“完璧に善い”という特性を表す用語として理解することがあるが、ここでは、あ

るはっきりとした余剰部分を含み、概念的把握をまったく寄せ付けない“語りえぬもの”としている。この聖性の発生要因として、著書<sup>[1]</sup>『聖なるもの』の中でルードルフ・オットーは、ふさわしい表現として、「戦慄すべき神秘」、「魅するもの」という言葉を挙げている。「戦慄すべき神秘」について、時として我々の内部で困惑させるほど激しく心情を揺り動かし、支配するものがあり、それは、「恐れ」の感情と近似性を持っている。そこから出現する不気味さの感覚などが聖性の発生を促すと説明されている。また、戦慄すべきというはねつけるような要因に対して、他方では同時に、そしてあきらかに、ある特殊固有の惹きつけるような魅惑的なもの、つまり魅了するようなものといった要因が存在するという。

## 7. まとめと展望

これまで、宗教、貯蔵、灌漑設備、聖なる場、またそこから派生した“聖性”というものについて研究してきたが、人間にとって聖性という存在は、古来においても現代においても、人間が理性を超えて欲する根源的な豊かさの一つであると考えられる。そこには人間が聖性によって限りなく大地を求める姿が浮かびあがる。

建築を取り巻く人間、そして大地。人間は大地から離れていく生き物である。しかし同時に、人間は大地から離れられない。人間が大地の上で生存するために大地を使いやすく改造する建築行為は、人の肉体と大地を分離させる。また、建築が大地を象徴した時、人間と建築と大地は融合する。

建築は、人間にとって大地からの離脱装置であり、大地そのものでもある。ここに建築の真意があると考えられる。

## 8. 参考文献

- [1]ルードルフ・オットー著、久松英二訳『聖なるもの』、岩波書店、2010年  
 [2]野本寛一『神と自然の景観論—信仰環境を読む—』、株式会社講談社、2006年  
 [3]ロジェ・カイヨワ著、塚原史訳『改訂版 人間と聖なるもの』、株式会社せりか書房、1994年  
 [4]上野誠『日本人にとって聖なるものとは何か』、中央公論新社、2015年  
 [5]岡谷公二『原始の神社をもとめて—日本・琉球・济州島—』、平凡社、2009年  
 [6]エドモンド・バーグ著、中野好之訳『崇高と美の観念の起原』、みすず書房、1999年  
 [7]藤森照信『人類と建築の歴史』、株式会社筑摩書房、2005年  
 [8]藤森照信、岡崎乾二郎「最後に残る建築は？」『ザ・藤森照信』、井松志郎、株式会社エクスマレッジ、2006年、pp.119-131  
 [9]多木浩二『生きられた家』、青土社、昭和59年  
 [10]中村貴志『ハイデッガーの建築論—建てる・住まう・考える—』、中央公論美術出版、平成20年  
 [11]James J. Gibson 著、古崎敬、古崎愛子、辻敬一郎訳『ギブソン生態学的視覚論—人の知覚世界を知る—』株式会社サイエンス社、1985年  
 [12]オットー・フリードリッヒ・ボルノウ著、大塚恵一、池上健司、中村浩平訳『人間と空間』、株式会社せりか書房、1988年  
 [13]サン・テグジュペリ著、堀口大樹訳『人間の土地』、新潮文庫、昭和30年

Figure1.(出展: <http://yuuma7.com/ストーンヘンジに行ってみた%E3%80%82行き方や謎を紹介/>)

Figure2.(出展: <http://natgeo.nikkeibp.co.jp/nng/magazine/0806/feature01/>)